

・ 改修工事と生まれ変わった庭園

20 世紀の第 2 半世紀は、定期的に住む人はあまりいませんでした。農業は途絶えたのです。そのため、公園は維持されることがなくなりました。

この地に新たな息吹をもたらすために、カステルノー城の改修工事の責任者であった、クレペール・ロシロン氏は、マルケイサックの子孫である、ミッシェル・ド・ヨンゲ・ダルドワイエ氏の支援と共に、1996 年にこの地の改修に携わりました。

改修は、**この地の保護**に結びつき、公園にかつての雰囲気をもたらすものです。1 年間に渡って、およそ 60 の企業と 10 名の庭師が作業に取りかかり、道を整備し、渓谷への展望台を配備し、城を改修し、生け垣や 植え込みを新しくするよう必要な高さに剪定しました。断崖は安全性を考慮して保護され、人々が見学できるよう設備が整えられました。

ジュリアン・ド・セルヴァルの作品をさらに装飾するような新たに配備されたものも見られます。城の向かいにある、**ワタスギギクとローズマリーの曲がりくねった道**、また、19 世紀のロカイユの雰囲気が漂う**水の道**は展望台から**滝**へと続き、40 m さらに下には**巨人の鍋**があります。

公園の維持には毎年**5名の庭師**が携わっています。

・ 近年の新しいポイント

ツゲのカオス (*Chaos de buis* - g) が 2003 年冬に作られました。城の後ろに、1996 年に 50 のセイヨウヒイラギガシが伐採され、ツゲが植えられました。この自然のツゲは、最初に折り曲げられてひとまとめに剪定され、測定器を使用して長さが整えられ、石ブロックのような雰囲気を演出しています。

2006 年より、公園は彫刻が多くみられます。アラン・ド・セルバル氏の「鳥」は、庭の創造性を高め、広場までの高台の散策道を楽しく演出します。

2007 年に、大通り沿いにツゲのコレクションが配備されました。ビュイ・ド・ボセレのマーク・ジョーンズ氏の協力の下、50 のバリエーションが用意されています。

2009 年に、**アーチ道** (*Allée des arches* - o) はアーティスト、ジェラルム・シャペールの巨大な彫刻があります。この作品は、特にシャンデルのソフレのために実現されました。

2010 年に、川から 100 m の高さにヴィア・フェラータが設けられ、断崖の 200 m のコースを楽しむことができます。

2011 年秋から 2016 年春にかけて、城の骨組みと敷石は完全に改修されました。

2017 年、中央の塔にある石の屋根組みは新しい骨組みに基づいて完全に改修されました。

マルケイサックのイベント

・ 復活祭の狩猟

復活祭の日曜日と月曜日の午後注：この催しに参加するには**お子様の事前登録**が必要です。

・ 庭園のイベント

6 月の最初の週末に、この美しい庭園は全国的な催し物に使用されます：展示会、剪定のデモンストレーションなど。

・ 細工のアトリエ、「自然への好奇心」

動物のマスク、風車、人形、フレームなどの制作を楽しむことができます（春休み、秋休み、5 月・6 月の祝日の週末、7 月・8 月は毎日）。

・ マルケイサックのヴィア・フェラータ：ドルドーニュ渓谷をいつもとは違う角度から眺めてみましょう

4 月中旬から 11 月中旬まで、予定に応じて。お問い合わせください。

・ ロッククライミング体験

6 歳以上のお子様に限ります。7 月・8 月の土曜日を除く毎日午前。

・ シャンデルのマルケイサック

6 月の第 1 土曜日、7 月・8 月の毎週木曜日、日没から夜中まで。

ぜひマルケイサックの散策をお楽しみください。
全スタッフが皆様のお越しをお待ちしております。

空中庭園 マルケイサック



ドルドーニュ渓谷を眺望

マルケイサック城の公園は、**文化財として登録**されている**私有地**で、17 世紀にさかのぼる一家から生まれたものです。大規模な**改修工事**を経てマルケイサックは **1997 年 3 月** に再びその扉を開きました。現在では、アキテーヌ地方において多くの観光客を誇る庭園となっています。

岩の突出部に整備が施され、**心地良く散策**を楽しむことができます。公園では、石灰質の高い断崖からアキテーヌの重要な文化財であるドルドーニュ渓谷が眺望できます。散策は **3 つの主要コース**が選べ、城から 800 m 先の**展望台**を目指します。川から 130 m の高さからは、**ペリゴールの美しい絶景**が一望でき、この格別な眺めは 2016 年、**ミシュランガイドの 3 つ星**に認定されています。

簡単に公園の見学が楽しめるよう様々な配慮がなされています。これらは後でご紹介します。参照ポイントとして、（）でくくられたアルファベット文字が、地図（受付で利用可）に記されています。

城の周辺

マルケイサック庭園には、2 つの対照的な面があります。庭と公園です。まず、**テラス**でくつろぎ、**岩の驚嘆すべき「ツゲの集まり」**をご覧ください。そして、一風変わった体験へと散策に出かけてみましょう。

・ ろくろ木工（季節限定）(le Tourneur sur bois - b)

庭園に入ると、季節に応じてろくろ木工のアトリエがあります。**黄金色に輝く**細やかな粒、ツゲはきれいな光沢を放ちます。これは、木工の版画、彫刻、ろくろに使用されます。ジャン=ピエール氏は改修工事中に**公園で剪定されたツゲ**を使用しています。

・ 鳥小屋と自然のパビリオン (la Volière et le Pavillon de la Nature–c)

散策の初めのポイント、歴史ある庭園の**鳥小屋**では、形や羽毛がちょっと変わった**鳩**が見られます。また、**クジャク**がツゲに囲まれて自由に生活しています。

自然のパビリオンでは、ペリゴールの野生動物に焦点を当てた 19 世紀の歴史ジオラマが体験でき、最近では、ジュラ紀にヨーロッパで生息していた、全長 7,50 m の恐竜の骨格模型が展示されています。2013 年アメリカで発見された、およそ 1 億 5 千万年前のこの巨大なカルノサウルスは、現在までに見つかっているアロサウルスの希少な骨格の一つに数えられ、このように全体的に非常に良い状態で残っているのは大変珍しいことです。

・ 城とテラス (le Château et les terrasses - f)

城の西側にある、**3 つのテラス**の整った設計は、ル・ノートルの生徒によるものであり、この地の古典主義の時代を垣間見ることができます。優雅なテラスからは、**カステルノー城**（中世の戦争博物館）の封建時代の要塞、**フェイラック城**、**ベナック城**が見渡せます。

現在の形として、城は、19 世紀の初めに**憩いの地**となりました。**シンプル**な設計を極めたこのマルケイサック城は、**敷石**または石瓦の、この地域特有の素材を使用し、素晴らしい**屋根組み**を施しています。ここ数年にわたって完全に改修された 700 m2 のこの屋根組みは **500 トン**を超えます！

この庭園では 2 つの全く異なる景観を楽しむことができます。渓谷を向かいに、マルケイサックの**正面は荘厳な雰囲気**を漂わせています。**中央**の塔には階段があり、これは歴史ある建物の名残を見せています。ツゲの生け垣の幾何学的な形は、建物のシンメトリーな構造を表しています。後ろはより和やかな雰囲気で、公園があり、**居心地の良い空間**となっています。

城の**食堂**は、フラマンスタイルの陶器の鍋が見られ、かつて住んでいた人々のルーツを思い起こさせます。2017 年に改修されたサロンは、帝政時代の雰囲気が見られる壁紙と家具を展示しています。

城の南側にある、復元された**寝室**と**トイレ**は、1880 年代の雰囲気を再現しています。家具、**天蓋付きのベッド**、**机**は、マルケイサックの大時代のものをそのままとめています。

- レストラン - サロン・ド・テ (le Restaurant – Salon de thé - h)**

城の北側にあるサロン・ド・テ（喫茶室）は季節に応じてご利用になれます。**屋根**もある**展望**テラスで、軽食、ケーキ、アイスクリーム、冷たい飲み物などをお楽しみいただけます。

- 砦と景色 (le Bastion - d)**

城の南側にある**砦**は、断崖の斜面に美しくそびえ、高い壁から、ドルドーニュの平野と曲がりくねった景色が眺望できます。この大きなテラスには**美しい庭園**があり、剪定されたシゲで囲まれています。

高台の散策道（la Promenade des Hauteurs）のスタートポイントとして、小さな緑の部屋からは庭園の美しい景色が広がります。

マルケイサックは、多くの変化が楽しめるツゲの幻想的な雰囲気 に包まれています。**曲がりくねった道**の庭園の設計は、**ナポレオン三世**時代のフランスで数多く取り入れられたものです。ツゲの**丸さ**と**起伏のある形**は、マルケイサックに**優しさ**と**ロマンチックな雰囲気**を演出し、それと共にドルドーニュ渓谷の景色と庭園は見事なバランスと統一感を保っています。

石灰質のこの地方において水は貴重です。岩に設けられた 2 つの**貯水槽**は、雨水を貯め、水やりに使用されます。

マルケイサックの散策

マルケイサックには**6 km を超える曲がりくねった道**があり、真の迷宮が楽しめます。しかし、この迷路は3つの主要道に分けられます。断崖の散策道（la Promenade des Falaises）、高台の散策道（la Promenade des Hauteurs）、大通り（la Grande Allée）があります。コース間を横断できるポイントがいくつもあるため、いつでも簡単に別のコースに変えることができます。

南側に**ドルドーニュ渓谷を望む**、断崖の散策道と高台の散策道には、公園の重要な展望ポイントがあります。北に向かい、草木で全体的に囲まれた大通りは、春の良く晴れた日は素晴らしいですが、全体的な景色を望むには適していません。

そのため、断崖の散策または高台の散策をお選びいただき、展望台へ向かうことをおすすめします。車いす、またはベビーカーをご利用の方向けの簡単なコースが地図に記されています。

- コースに沿って、美しい**イラスト**が使用された**説明**で、渓谷の歴史、動物、植物について学習できます。

- 断崖の散策道（la Promenade des Falaises）**

砦（*Bastion - d*）を超えて開始し、**礼拝堂**（*Chapelle - j*）に向かいます。庭園の眺望には、高台の散策道のスタートポイントである**ローズマリーの道**（*Allée des romarins - i*）より目指すことができます。

断崖の散策道では、**展望台**（*Belvedere - w*）に到達する前に**滝**（*Cascades - t*）を楽しむことができます。

- 高台の散策道（la Promenade des Hauteurs）**

城の角から始まり、**ローズマリー通り**（*Allée des romarins - i*）を進みます。高台の散策道は、公園の3つの高台のポイントにつながります：**カルヴェール**（*Calvaire - n*）、**鐘型的小屋**（*Cabane en cloche - q*）、**展望台**（*Belvedere - w*）。比較的冒険的なコースであるため、難しいと思われる場合はお控えください。

- 大通り（la Grande Allée）とシャトルバス**

半月の形をしたベンチのあるサロン・ド・テより始まり、1600 m 先の**詩人の隠れ家**（*Asile du poète - z*）を目指します。この**石垣の小屋**は庭園の境界地点となります。

完全に**平野**、500 m を超える**直線**で、長い展望が楽しめます。この驚嘆すべき設計は、**擁壁**の構築と**岩に穴を開ける**といった特別な技術により生まれたものです。

ハイシーズン時は、**シャトルバス**が用意されており、大通りより城に戻ることができます。

- お子様向けコースと遊戯エリア**

お子様は公園の曲がりくねった設計を楽しむことができ、かくれんぼができます。**シーソー**や**小屋**などの遊ぶことのできる**遊戯スペース**が用意されています。一つ目（*Aire de jeux - u*）は、**滝**（*Cascades - t*）の**近くにある**展望台のふもとにあります。木々の間に新しく設けられた2つの小屋は、お子様の遊び場となるでしょう。二つ目（*Aire de jeux - y*）は、**ヒースの小屋**（*Cabane en brande - x*）の近くにあり、木々の100 m 以上の長さの網が設けられた大きなスペースです。

城の後ろ、レストランの上、自然の大きいシゲに囲まれた**子供のラビリンス**（*Labyrinthe des enfants - k*）があり、遊ぶのにぴったりです。

また、お子様にさらに公園をお楽しみいただけるよう、受付で**絵本**をご用意しております。

断崖の散策道にある**小さな野生動物のコース**（*Parcours des tout-petits -r*）は、小さな野生動物のイラストと共に楽しく登ることができ、お子様にぴったりです。

ツゲと草木

ツゲは庭園のあちこちにあります。至るところにしっかりと植えられ、散策の**道**しるべとなるものです。**自然の景観**を管理するかのように庭園全体を表現しています。

ツゲの**活気にあふれ**、**持続性の高い**草は、季節を通じて変わらず存在します。年中、緑のまま変わることはありません。一方で、ツゲは**剪定**も可能で、複雑な植物の形の実現も可能です。これは**トピアリーアート**です。これは、数世紀来、特にイタリアのルネッサンス期の庭園に由来するものであり、ツゲは庭園にて広く植えられてきました。

石灰質の土壌に適した、**一般的なツゲ**として知られる、セイヨウツゲは、**乾きに強く**、また、木の下でも成長できるほど強いものです。

剪定は年に 2 回、春の終わりと秋の始まりに行われます。木の下の生け垣は、年に 1 度、夏の終わりに剪定されます。15 万のツゲの剪定は、**剪定ばさみにより手作業**で行われます。電動の剪定ばさみは使用しません。葉を痛ませ、黄色くさせてしまいます。

マルケイサックの岩の突出部のあたりでは、**水の少ない石灰質の土壌**と**日当たりが特別な環境**に応じて自然に生まれた**草木**も目にすることができます。南側に向いた断崖は日当たりが非常に良いです。日中は暖かさを保ち、夜は涼しくなります。冬は、もやや霧が川に立ち上り、草木を包み、厳しい寒さをよせつけません。公園の**南側の斜面**は、**セイヨウヒイラギガシ**、ダウニーオーク、モンペリエのカエデ、イチゴノキなどの**地中海**の草木が見られます。これらからはツゲのように、**乾いた土壌に適した**性質が見られます。厚みがあり、堅い葉は、しばしば光沢のあるものや、時には毛のあるものもあり、蒸発による植物の水分蒸発を抑えます。これにより、水の必要性は減ります。夏は、**セミ**の鳴き声がこの斜面の南仏の雰囲気を演出します。

反対側、**北側の斜面**はより湿度が高く、**大西洋で見られる種類**の草木が生えており、クマシデ、コブカエデ、コナラ、ニセアカシアなどを目にすることができます。また、ブナの木も最近植えられました。

展望台から、**薄暗い葉のセイヨウヒイラギガシ**が多くあり、不規則な形の公園の南側斜面は、北側斜面よりもより濃い色になっています。この地域のペリゴール・ノワールの名前は、サルラデの日当たりの良い斜面のこの特徴に由来するものです。

驚嘆の歴史

- 公園の整備**

マルケイサックの歴史は古典主義の時代より始まります。ペルトラン・ヴェルネ・ド・マルケイサックは、1692 年、一家でこの地の所有主となり、館周辺のテラスを配備しました。

19 世紀初頭、1830～1840 年の間、軍人ジュリアン・シエールは、馬での散策のために大通りを設け、礼拝堂を建築しました。この礼拝堂は後年改修されています。

しかし、庭園と散策道の設備は 19 世紀末に実施されました。**ジュリアン・ド・セルヴァル**は、1861 年にこの地を継ぎました。庭園に情熱を持ち、30 年の間、この世を去るまで**マルケイサックの美化**に捧げてきました。イタリアから戻った後、ジュリアン・ド・セルヴァルは**数万のツゲ**を植え、マルケイサックの庭園にまさしく「**熱意**」を吹き込んだのです。砦の菜園を憩いの庭園に変えました。

農学に情熱を持つ彼は、公園を**装飾する**草木も植えました。**菩提樹**、**セイヨウハナズオウ**、**エニシダ**、**プラタナス**、**ニレ**などです。イタリア文化に夢中な彼はマルケイサックに**イトスギ**や**カサマツ**を植えました。最後に、ジュリアン・ド・セルヴァルは**ナポリのシクラメン**を植えました。現在では、8 月～10 月の間、カラフルなじゅうたんとなります。

18 世紀の終わりに流行したロマン主義の庭園にインスピレーションを受け、ジュリアン・ド・セルヴァルは、公園の南側斜面を明るく演出しています：**展望台**、**曲がりくねった道**、小さな**階段**、3 つの**石垣の小屋**、楽しく和やかな大きな**広場**、**円形の建物**、**カルヴェール**、**ロカイユ**、**岩に設けられたベンチ**など。これらは、庭園の絵のような美しさをさらに強調しています。

ジュリアン・ド・セルヴァルは、マルケイサックの**礼拝堂**を改修しました。ネオゴシックのスタイルを加えています。

一方で、マルケイサックは、**農業の地**でもありました。19 世紀末、この事業は大きく変わりました。ジュリアン・ド・セルヴァルは、**多くの付属の建物**を建てています：倉庫、温室、果樹園、鳩小屋、馬小屋、羊小屋。

彼が 1893 年にこの世を去った後、家族はその設計をそのまま残しつつ多くの人が訪れることができるよう公園を維持しています。この作品を美しくする装飾が施されています。城の東門の角を装飾する**ロカイユ**、砦を装飾する**ユツカ**があります。

20 世紀始め、ジュリアン・ド・セルヴァルのむすめ婿であり、ローマのベルギー人聖座大使である男爵マクシミリアン・デルブは、友人であるジュゼッペ・サルトを招きました。マントヴァ司教は、**ピウス 10 世**として 1903 年に教皇になりました。緑の屋根の陰で、サン＝ジュリアン・ド・セナの小さな礼拝堂の向かいに、岩に設けられた教皇の腰かけた場所（*Siège du Pape - s*）があります。きっとそこで思考をめぐらしていたことでしょう。家族の一員であるこのベルギー人により、城内からはフラマン様式の家具やオランダ人祖先の影響も見受けられます。